

国際結婚の西川さん

ワイン
教育学部社会学科社会科学専修 2 年

目次：

動機

インタビュー内容

- ・ 結婚前
- ・ 結婚して
- ・ 現在

結論

終わりに

動機

私は今住んでいる友愛学舎という寮の担当者の西川嗣夫さんに取材することにしました。西川さんと知り合ったのは去年の三月に寮に入るための面接の時でした。その時、西川さんは中国語が話せることを知りました。日本語教師として中国の大学に勤めた事ことがあって、中国語を学習したことがあります。しかし、中国語があれほど上手な原因はそれだけではなく、実には家に中国の西安から来たお嫁さんがいます。つまり、国際結婚です。

以前、私にとって国際結婚なんて考えられませんでした。それはなぜかというと、自分と背景、文化、生活環境どころか、言葉さえ違う人と結婚することはなんと不思議だと思っているからです。そのうえ、実際にその国の国民になりたいだけの理由で、その国の人と結婚するというような話を耳にしたことは何回もあるから、いつのまにか国際結婚に対してなんとなく、いやな感じがして、偏見をもっていました。しかし、来日二年、いろんな人と出会って、国際結婚は思ったほど有り得ないものでもないと考え方が少しずつ変わってきました。教会の友達や周りの知り合いの中に国際結婚の方が多いです。もしかしたら自分も日本に素晴らしい人と出逢って結婚することになるかもしれないと考え始めた。それゆえに、身近に国際結婚をしている方に国際結婚の楽しみと苦しみ、また子供に与える影響や国際結婚の家庭におけるさまざまな揉め事などについて、話を聞かせて頂きたいと思っているのです。

では、多くの国際結婚をしている知り合いの中から、なぜ西川さんを取材対象に選んだのか。それは西川さんが自分の家族について語る時に、目が輝いている様子が私にとってすごく魅力的だからです。知り合ってる国際結婚の方の多くは、結婚相手とのコミュニケーションが悪いとか、相手に不満を持っているとか、こうゆう話ばかり聞かせてきました。しかし、私は西川さんからそういう苦情や愚痴を聞いたことがぜんぜんありませんでした。驚いた事には、西川さんは自分の妻をいままでも「愛人」と呼んでいます。ラブラブで、うらやましくてたまりません。

しかし、国際結婚は決して容易なことではありません。西川さん夫婦の間に絶対につらいことがあったと思います。夫婦二人がうまく合わせて暮らしていくためには普通の結婚よい倍の努力が必要のではありませんか。全く違う世界に生きてきた二人はどういうふうにして、文化、習慣や言語の壁を乗り越えられるのでしょうか。また、二人はどんな問題を直面しているのでしょうか。国際結婚の家庭における危機はなんでしょうか。西川さん夫婦はどんな経験をしてきたのでしょうか。そして、上手く行かない時は諦めようと考えたことはありましたか？それはどうやって乗り越えましたか？これらの質問を通じて、今国際結婚の苦しみや楽しみが全然分からぬ私は分かるようになるかもしれません。将来、もし自分が国際結婚するなら、これから西川さんに聞かせてもらい話は参考として非常に役に立つと思います。

インタビュー内容

まず、西川さんの家族の話から始めます。

西川さんが結婚したのは 1998 年の夏で、今年の夏は五周年になります。子供は二人がいて、上の子は女で 2 歳です。下の子は男でハヶ月です。両親は今山梨県に住んでいます。西川さん一家は千葉県に住んでいます。

N： 西川さん

W： Wing

・結婚する前

西川さんが今の奥さんと知り合ったのは、中国の江西省で、1994 年の秋でした。西川さんは当時江西省の医学大学で日本語を教えていました。奥さんは大学近辺の文房具屋さんで働いて、コーヒーやファクスの仕事をしていました。授業のレジュメを作って、コピーする作業を繰り返す西川さんは、そこで奥さんと出逢いました。カタコトの中国語しかできない西川さん、カタコトの日本語しかできない彼女は、

どうか心が通じたようでした。そこから四年間着き合って、ようやく結婚することにしました。

W: 結婚しようと考え始めたときに、まず頭のなかに思い浮かべた問題はなんですか？ 恐れることはありましたか？

N: やっぱり彼女は日本の生活に慣れるかどうかのことを心配してたね。（やさしい～）日本に来たことが無く、日本語もそんなにしゃべれないから、結婚する前には一年日本に留学させようと思ったけど、その時は中国人の留学が厳しくて、二回申し込んだけどだめだった。仕方なく、そのまま結婚することにした。

W: 特に心配した、不安だったのはありませんか？

N: 私自身はあまりなかったけど、向こうは不安だっただろう。

W: その時、お互いに魅力的だと感じたところはどこですか？

N: 魅力的なところか…向こうの人はさ、ことをはっきり言うの。好きとか、きらいとか、そういうのは、ある意味で分かりやすくて、いいと思う。ただ、中国人だから特に彼女の性格がどのような性格かあまり考えない。私の個人的な考え方では、どこの国の人でも、民族でも、やっぱりいい人もいるし、悪いひともいる。だから、あまり民族とか、国というフィルタ - を通して人を見ないほうがいい。日本人といっても一人一人違うから。二人は気が合いそうな感じがして、付き合い始めた。

W: 奥さんの方は？

N: あの…多分ね、あの街では外国人が少なく、最初は日本人が珍しかったからかなあ。（笑）

話がここまで進んで、西川さんが結婚と決めた時は生活上の問題に心配とか、悩むとかはしなかった感じが受けました。なんでだろう？？西川さん自身も海外で生活したことがあって、国籍や異文化、言葉をみる目も違うからだと思った。

N: 一つの家族だから、国籍とかそういうのはあまり考へない方だから。でも、むこうからすると、やっぱり大変なことだらうとは思う。

「もし奥さんの方からどうしても日本に行くのがいやで、中国で生活したいとしたら、西川さんはどうしますか」という質問をしたら、西川さんは「まあ、そうだったら、なんとか中国に行って仕事を探す」と答えました。お互いのための犠牲というのには美しいですね。

・結婚して

W：結婚してどんな思いしたんですか？結婚してよかった、想像以上つらかったとか。

N：日本で暮らしているから、あんまりこっちは特に無かったけど、奥さんはやっぱりここに来て一人だから、ややホームシックになった。逆にこっちが困っちゃうね。でも、ちゃんとなくさめてたよ。

W：結婚して大きな問題というのは？

N：一般の家庭にもあるような問題だけど、例えばうちの奥さんはやっぱり働きたい、自分の手で稼ぎたい考えがある。でも、子供がいるから、なかなか…ね。

W：文化上、習慣上の違いでの争い、口けんかとか、つらくなったりしたことはありませんでしたか？

N：特に大きい問題は無かったけど、全くないわけでもない。例えばうちの奥さんは今専業主婦で、私は外で働いて、自分ではちゃんと家事の手伝いをしてるとは思うが、日本の男と比べたらね、でも、中国の男と比べたら少ない方かもしれない。こっちは納得つもりなんだけど、奥さんはあんまり満足してないよう。まあ、ケンカにはならないけどね。

W：ケンカする時はいつも西川さんが先に頭をさげるのですか？

N：いちを結婚する前にルールを作った。仲直りみたいの。24時間ルールというのがある。午前零時すぎたらまずあやまること。自分が悪いと思う方から。一日に終わらないならしようがない、一週間ルール、日曜日になるまえに仲直りを。聖書に書いてある腹を立ててはならないの喩えを基づいたもの。

その聖書の箇所について調べました：

マタイによる福音書5章23節～24節

「だから、あなたが祭壇に供え物をささげようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし。それから帰ってきて、供え物をささげなさい。」

*面白いじゃないですか？

堅そうなキリスト教の教えをちょっと面白くして現実の生活に持ち込めば、幸せな毎日を作り出す。クリスチャンである自分も結婚したらイエス・キリストの教えを夫婦

生活で活用したいと思います。

W：結婚して、ちょっとでも後悔したことありますか？

N：まあ、ないわけでもない。ただそれは中国人だから後悔したというのではない。

W：でも、「もし日本人だったら、もっと楽かもしない」というのは？

N：（すぐには答えられませんでした）まあ、それは大きい問題ではない。ただ、近所のひととか、日本のひととかとの付き合いというのがある、そういう時に、中国人だから、まあ皆さんは了解はしてるけど、やっぱりマナーというのがあるね。普通の日本の家庭では、ご主人が仕事から家へ帰る時に、奥さんは「お疲れ様」とか、「お帰りなさい」とか言うじゃない？うちの奥さんは未だにあまり言わないね。あと、文化背景の共有することができないこととか。大きな問題ではないけど。

ここに思ったのは、確かに同じ文化背景や言葉を共有できないことは非常に残念なことだけど、でもこういった違いを超えるものは絶対存在していると思います。マイナス的に捉えず、違いというものを面白いこと、あるいは楽しいことに思えば、困難があっても、挫折に遭っても、自分にプラスになれると思いました。この考え方を、西川さんに伝えたら、共感を呼びました。

・現在

「振りかえてみると、中国でのこの出会いは、偶然ではなく、運命が大きく関わっていると思う。奥さんが働いてた文房具屋は学校に一番近い文房具屋じゃなかった」と西川さんが言いました。自分の奥さんがいくらつらい思いをしたのかを西川さんに聞いたら、ひとこといいきれないけど、大変だっただろうと答えました。日本では仕事の関係で、夫婦が一緒に過ごす時間が少ないため、今西川さんはできるだけ早く家へ帰って、コミュニケーションの時間をとる努力をしているようです。

（ ）子供の話

W：子供の教育については考えましたか？

N：今子供はまだ小さいから、実際の問題はあんまりないけれども、とりあえず、言葉は両方とも分かるようにしてあげたいなあ。どっちを母国語にするかは、どこで生活するのが長いかということで、どっちでもいい。言葉というのは一つのコミュニケーションの手段だから。それはどちらにしても本人の好きの方にすればいい。

W：オープンなファミリにしたいという感じ受けましたけど…

N：まあ、そうだね。子供の教育に国籍とか、言葉とかにあんまりこだわってもしようがない。日本人なり、中国人なり、アメリカ人なり、もっと人間として共通したものと

いうのがあるはずだ。そこを一番重視したい、こういうひとになってほしい。

N：この間よく「子供と遊ぶ時間少ないね」といわれた。多分中国の男性はより子供と一緒にいる時間長いかな。仕事はそんなに忙しい方ではないけど、やっぱり日本に就職することは中国と大分違う。自分では平均よりはるかに子供と一緒に時間が長いと思うけど、むこうはやっぱり少ないといつも言っている。日本で就職、アルバイトしたことがないからね、働いてみれば考え方変わるんだろう。

W：こういう時、どうしても分かってもらえない時、西川さんはどうしますか？

N：最終的には自ら変えることだね。どこに暮らすことは私にとってあんまり重要じゃない。やっぱりだれと暮らすかというのが非常に大切だと思う。中国でも、日本でも、家族と一緒に暮らしたい。やっぱり日本の暮らしに慣れないと言われたら、中国で生活しても別の問題じゃないと思う。

(一) 結婚と信仰と伝統

日本と違って、マレーシアの中華系の家庭では結婚して親と同居するのが普通です。そこからいろいろな揉め事が起きてしまいがちなので、極自然に、私は嫁姑の問題について結構恐れている。

西川さんの家は嫁姑の問題はないと本人が言いました。なぜかというと、西川さんの親はクリスチャンであって、キリスト教というのは一つに民族、家族と考える。あまり国籍とか人種とか関係なく、どこのひとでも同じ、という考え方をもっているからです。自分と違うものを排除するのではなく、受け入れることはなんとすばらしいことでしょう！！

また、西川さんの奥さんはもともとキリスト教徒ではないが最近クリスチャンになった。西川さんは家庭と宗教をどういうふうに関係付けるか？

N：日本人にとって宗教はいまいいイメージじゃないね。でも、日本の場合は宗教というより、むしろ伝統や集団という言葉の方が適切かもしれない。例えばさあ、細かく言っちゃうと、夏にいろんな地域で祭りをやるじゃない。そうするとだいだい皆参加するじゃん。昔の神社とか祭りというのは近くに住む人々のコミュニティの中心であった。皆同じ神社に所属して、祭りやっているわけ。今では昔の言った神社と違って、宗教の意味はほとんどなくなっているけど、近所に住んでいるひと、町内会とかとの付き合いはやっぱり必要だし。そうすると町内会そのなかから神社や祭りにお金を出す。だけれども、クリスチャン、あるいはムスリムの方でも、自分はその宗教だから、神社にお金払いたくないというのがある。そういうふうに言うと、信教の自由から言えばそうかもしれないけど、なかなかこうコミュニティには入らないよ…おそらく町内会の他の人々は別に宗教に儀式に参加しているとは考え

ないし、普通に神社や祭りとかやっている…特に地方は大変だね。近所の人との付き合い、親戚との付き合いとか。伝統的に女の子は「嫁に入る」という言い方がある。だから自分のもともとの家族のなかから外れて、旦那の家庭の一員、メンバーになる。集団の所属ところが変わること。

W：ここに宗教の話になるんですけども、結婚と宗教はあまり関係ないように感じられるが、実際にすごく切実な問題だと思います。日本はよく宗教に寛容的だと言われるが、どう思いますか？

N：日本は宗教に寛容というよりも、無知だと思う。宗教教育はやっぱり必要だと思う。信者にしようと思って教えるじゃなくて、やっぱり宗教というものの社会的役割とか、どういう考え方を生み出したとか、学校で教えるべきだと思う。

W：宗教というものは家庭と関わると非常に身近なことになるんですね。違う信仰を持って暮らしていくのはすごく難しいと思います。例えはうちの教会に日本人と結婚して、教会へ行くのを反対されて、行けなくなってしまったことが少なくありません。ここでまた問題を起こしうるですね。

N：日本の場合は教会やっぱり女性の方が多い、だからご主人がクリスチヤンじゃないけど奥さんがクリスチヤンということで、ご主人は特にキリスト教に対して反感もないし、偏見もないし、かといって自分が教会に行くことも無い。奥さんが信者じゃない場合の方がやりやすいかもしれない。全く別の宗教を持ったもの同士が結婚するといった場合は極少ないだろう。両方同じか、または片方が持っているか。（でも、本人は持っていないけれども家族が持っている場合はまた難しいですね。）そうだね。

*ここまで西川さんといろんなことについて話しました。国とか、宗教とか。けれども西川さんにとってこれらにはあまりこだわらないと感じました。では西川さんにとって国際結婚におけるもっとも重要なのは何だろう？

W：国籍、文化、宗教、いろんな面から考えて、西川さんにとって国際結婚において一番大事なのは何かと思いますか？？

N：この人あの人皆一人一人違うというのが大前提で、自分の考えているような人じゃない部分というのがやっぱりある。違いはちゃんと認めましょう。違いは必ずあるということで、違ってもあんまり分けないと。価値観、考え方というものはみなそれぞれ違うわけだから。日本人同士が結婚の場合も違いは少ないかもしれないけど、

どうしても出てくるだろう。

- * 西川さんの意見に私はすごく賛成です。今の社会はあまりにも違いを強調しそうるせいで、ステリオタイプや偏見などを無意識に思わせてしまうと感じからです。西川さんの言った、違ってもあんまり分けないことを私達が勉強しなければならないことではないかと思います。

W：奥さんことを今どう思いますか？

N：まあ、特になんか才能があるとかないけど、まあ普通の市民として、母親として、パートナーとして、私は満足で誇りを持っている…（笑いながら）

W：自分の奥さんあるいは主人を自分の誇りに思わないと文句ばっかり出でますね。そういうパートナーとして、母親として頑張って奥さんことを大事にして、誇りに思うことがすごく大事だと思います。（いつも奥さんことを話すとき目が輝いているのは自分の奥さんに誇りに思うからかなあ）

N：結婚したのが遅いからね。結婚したのが35歳の時。25, 26歳で結婚すればそういうことはあまり考えなかつたかもしれない。

結論

国際結婚に対するイメージはほとんど外れた、とインタビューの直後に感じました。動機を書いた時に、西川さんはいろいろな困難や問題を乗り越えてきたんだろうと思ったが、そうではなかつた。文化習慣上、または宗教、価値観の違いでいろんな困難を取り組んだから奥さんことを大切にしているのだろうと思って、それも間違つた。身の回りにたくさん国際結婚の人がいて、よく耳にしたのは彼らの愚痴、結婚相手の国や文化に対する批判や偏見。知らないうちに自分も国際結婚に対して、偏見と恐怖感を生み出しまつた。しかし、そんな私の国際結婚観を変えてくれたのは西川さんとの出逢いだ。いつも幸せそうに自分の奥さんことを語つていて西川さんの結婚話を聞いて、国際結婚ってそんなに難しいことでもないじゃないと初めて思った。そして、インタビューを通じて、自分は国際結婚について何も分かっていないことをも一度感じた。今まで文化や言葉の違いで苦労しなければならない国際結婚のイメージと違つて、西川家にはそういう問題はなかつた。例えば、違う生活習慣の争いとかいっぱいあったでしょうかと聞いたら、あまりないと答えてきた。西川さんは日本人だから、子供にも日本語を母国語にしたいでしょうと思ったら、中国語でもいいよと西川さんが言った。なんで今まで聞いた国際結婚話の中に、

西川さんだけが違うの？と考えると、やっぱり西川さんのことだからだ、と思わずにいられない。西川さんが言ったように、結婚して自分ではあんまり心配とか、つらいとかは無かったが、奥さんの方は多分自分の想像以上苦しんだかもしれない。だからこそ、特に何か才能があるから、あるいは何ができるから誇りに思うのではなく、自分の奥さん、パートナーとして、子供達の母親として頑張ってきた彼女を誇りに思うのである。西川さんの奥さんに対する思いやりと哀れむの気持が大きく左右していたのではないかと感じた。

国際結婚において一番重要なのは何かを話す時、違いというものをあまりにも強調しすぎると大変になるから、もっと人間として共通なものを見つけ出すことのほうが大事だと思っている西川さんはすごく魅力的に感じた。国際結婚における普通に出てくる文化の衝突ですら西川さんの家にあまりなかったのは何故なのか？その裏を支えているものはいったいなんでしょうか？それは西川さんの人間を見る、考えるときの柔軟さであるとインタビューを通してつくづくと感じた。西川さんが言った通り、違いを区別するのはわりと簡単で、違いを受け入れて、お互いに譲り合うことが逆に難しい。人間を国や民族、宗教、文化などのフィルターを通して見るのは違いを見つけ出すばかりで、もっと人間として共通なものに目を向けることが大事と考えているから西川さんの家は他の国際結婚の家庭より和やかのだと思う。

この考え方は国際結婚に限らず、現在の国際社会を理解し、うまく溶け込むために非常に重要で不可欠なのではないか。偏見、ステレオタイプ、差別のようなものは違いから生じるものだと思う。したがって、違いに目を向かないのではなく、ちゃんと違いを認めて、それをみる目を変えるに力を注ぐことは何よりも大切だとしみじみと感じる。

インタビューを通じて感じたことは国際結婚を通して表れた西川さんの性格が自分にとってとても魅力的である。自分も西川さんの持っている人間味でいろんなひとと出会って付き合っていきたいと思う。また、将来自分の主人もそういうふうな人であればいいなあ

~

終わりに

初めてこの授業に出た日はいまだにはっきり覚えている。いろんな国の人人がいて、いろんな年代の人と一緒に授業を受けるのがはじめて、どきどきしながらとっても不安だった。日本語の問題、そして年齢の差、経験の差でクラスの人とのギャップが激しいのではないかと最初からずっと心配していた。自分と違うということを恐れていて、自分の意見に反する考え方を受け入れづらいから、最初の心配があったのかもしれない。しかし、今思つ

たのは、これらの違いこそこの授業の面白さだ。

私にとって日本社会に暮らすというのは、前言った「違い」との格闘だ。その「違い」と戦うために、話し合うことは非常に大事だと感じた。この授業では、話し合いの場を提供した。「自分」と違う背景、経歴、年齢、国籍などのクラスメートと話し合って、自分の中に無意識に生じた偏見や差別を直視することができた。また、お互いの考え方を理解し、尊重し、様々な角度から物事を考えることもできた。それによって個人のなかにあった偏見などがなくなることもあった。問題が生じるときに、話し合いによって解決を求める、妥協したり、強く主張したりする。まさに「違いの克服」だとしみじみと感じた。

この授業はなぜ「言語文化」というのかと聞かれて初めてこの質問を真剣に考えはじめた。難しい理論は私には分からぬが、おそらく言語の中に文化が入っていて、逆もまた同様、文化の中に言語と深く関わっているからだ。言語を理解しようとすれば、文化を理解せねばならない。逆に、文化を理解しようとするのならば、言語は極めて重要だと考えられる。来日してもうすぐ二年半になる、その間にいろんなカルチャショックを受けたり、言葉が通じなくて落ち込んだりすることはしばしばあった。（それは今も続いている）そこでよく関連させて考えたのは、言葉は異文化理解のための一つの道である。異文化を理解するための手段はいろいろあるが、言葉を学び、それを使って実際にその文化をもっている人々と交流する方法が一番誤解の少ないやり方ではないかと思った。確かに、同じ言葉をしゃべっても誤解が生じる。こういう時こそ、言葉、文化以上のものが求められる。それは何かと考えると日本人のよく口にする言葉　　以心伝心ではないか。深いつながりを持っている言語と文化の間に、私達は生きているのである。

最後に、クラスメートの日野さん、米田さん、中川さん、林さん、徐さん、ゴさんに、またたくさんのこと気に配って、リードしてきて頂いたみよさんと授業でいろんな貴重なコメントをして頂いた細川先生に心からの感謝の気持ちを表したいと思う。

謝謝
唔該
ありがとう
Danke
Gracias
Terima Kasih^-^